

池内紀 × 川本三郎

にっぽん そぞろ歩き

第13回 旅を楽しむ好奇心と知恵



お二人の著述の背景にある見方、考え方。その養分となってきたものの一つは間違いなく旅です。いかに旅が思索を深めてくれるのかは、お二人の話から本当によく伝わってきます。ただし、その旅にはコツがあります。お金ではそのコツは買えません。

われら、温泉友達

川本 最近、池内さんの『湯けむり行脚 池内紀の温泉全書』と『東海道ふたり旅 道の文化史』が立て続けに出たので、今日はこの二冊を話のきっかけにしたいと思ってきました。前にもお話ししたと思います。私が池内さんと初めて出会ったのは、一九八四年くらいだったでしょうか？ 種村季弘さんと池内さんと私で、温泉鼎談というのをしたんです。文藝春秋の本誌の仕事で、場所は島根県の玉造温泉でした。そういう意味では、私たちは温泉友達ですね(笑)。

編集部 玉造温泉では、現地集合、現地解散だったんですか？

池内 そうだったと思います。交通機関も、それぞれ自由でした。二泊三日で、種村さんはああいう方だから、「鼎談はいちばん最後でいいから、あとの二日は遊んでください」とおっしゃって。

川本 当時はまだ出版界も元気な時代で、いま思えばよくあんな仕事をさせてくれたなあと思うんですが、あのころは、いまみたいに温泉ブームではなかったですね。テレビや雑誌で温泉特集をしきりとやるようになったのは、やはりバブルのころからでしょうか。

池内 そのころから、温泉そのものも、うんと変わりましたね。『湯けむり行脚』のあとがきに書きました。が、観光化と巨大化と高級化が一気に押し寄せて、中小の味のある宿はみんな蹴散らされてしまう。そういう現象がありました。

編集部 池内さんは、国内の温泉はそうとう入っておりますね。

池内 数は数えていますませんが、ずいぶん行ったようです。山の帰りとかが多いから、普通の人がなかなか行かないような、行けないような温泉に行きました。

編集部 川本さんは、鉄道旅行の途中で？

川本 そうですね、鉄道旅行のついでに入れる温泉が

あれば、という感じです。いまは温泉好きの本がたくさん出ていますが、以前はそんなになかった。そんななか、私が温泉好きになるきっかけになった本があります。一九八〇年代にプロレス専門の写真家がいる、その人が温泉の写真ばかりを収めた写真集をつくったというので送ってくれたんです。なぜプロレス専門のカメラマンが温泉なのかと思ったら、プロレスって地方巡業をしますね。その巡業先で仕事をした後、近くに温泉があれば入っているうちに、温泉の写真も撮るようになったんだそうです。

池内 ぼくなんかは、大学の教師をやっていたころに集中講義という制度があって、地方のいろんな大学に行つては、一週間居つめて講義をするんですが……。

川本 行き先は、自分で決められるんですか？

池内 いえ、向こうからお呼びがかかるんです。それで、一週間で半年分の講義をやってしまう。

川本 それは、けっこう疲れるでしょう。

池内 疲れますけど、夜はヒマですから、近所の温泉に行くんです。昼間は大学、夜は温泉。そんなことを十年くらいやりました。

川本 温泉といえ、つげ義春の影響も大きかったです